

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

斎藤菜穂子『蜻蛉日記』研究—その表現と形成—

本論文は『蜻蛉日記』の詳密な表現分析を通して、作品の形成を考究したものである。そのようなアプローチは、すでに先学によってなされてきたが、この論文では「書く」という営為を先鋭化してとらえ、周辺の文学作品と積極的に関わらせることで『蜻蛉日記』を新たに位置づけようとしている。具体的には、冒頭部の散文表現、和歌的表現の摂取、作為的な表現、「書く」の語が表すこと、という四つの柱で『蜻蛉日記』の形成を多角的にとらえ、「書く」ことが作品を統括する原理であることを論ずる。作品内に自閉する傾向が強く、閉塞感も否めなかったこの日記の研究状況に、新たな視界を拓くものと評価される。

まず序章で、『蜻蛉日記』の表現と形成に関わる研究史と、それを踏まえての本論全体の位置を示している。Ⅰ「私家集からの乖離」は五つの章からなり、『蜻蛉日記』が歌反故の集積という私家集性から乖離していく様相を、作品冒頭部の表現を中心に考察する。散文表現、また和歌との関わりを分析し、体験時の和歌の表現不足や齟齬を補うべく、自律的な散文があらわれる実態を捉える。第一章「冒頭部の「とばかり」について」は、冒頭部の求婚記事に二例ある「とばかり」の意味を考察し、冒頭部から既に自立的な散文表現が現われていることを指摘する。第二章「ぞ」「なむ」の一考察」は、第一章の補遺としての性格を持ち、冒頭部の「ぞ」「なむ」を考察。第三章「〈已然形＋ば〉の表すもの」は、冒頭部に集中的に登場する〈已然形＋ば〉が、求婚前期の倫寧女の主体性を描き取る特徴的な表現であることを指摘する。第四章「結婚前後の和歌の変化」は、結婚前の非典型的な詠歌は対する兼家の類型的な詠歌との間にずれを生み、そのずれを埋めるべく散文表現が綴られたと述べている。第五章「〈父の離京〉の贈答歌」は、初めて充実した散文表現が示される〈父の離京〉の記事における父倫寧と夫兼家との贈答歌を分析したものである。いずれの論考も手堅く用例を拾いながら論じた誠実な仕事であり、研究史の上でも、このような作業がいずれどこかでなされるべき必然性があった。

Ⅱ「引歌表現と歌語」は、三つの章からなり、『蜻蛉日記』の形成に多大な影響を与えた和歌的要素のうち、散文表現に直接関わる引歌表現と歌語の摂取について考察し、そこに本来の意とはずらされて表現される特徴的な様相を指摘している。第六章「『蜻蛉日記』における引歌表現」は、鳴滝籠り前後の引歌表現に、本歌からずらして表現されていく例を摘出し、その意義を論じたもの。第七章「鳴滝籠りの引歌表現群」は、鳴滝籠りの始めの部分の引歌表現が重層化している箇所を下巻への転回点を見る。第八章「『蜻蛉日記』の「鶯」」は、「鶯」の用例の分析から巻ごとに変化する歌語からのずれを考察する。第九章「歌語の変化と鳴滝籠り後の意識」は、鳴滝籠り後の表現世界が、和歌の世界に集約されないものと指摘する。従来の指摘を踏まえながら、そこから新たな展開を模索しており、和歌から自立する散文世界ととらえるところに、論者の主張がある。ⅠとⅡとを架橋する観点であり、精緻な読解の積み上げには十分な説得力が認められる。

Ⅲ「作為的表現と書かれた世界」は、五つの章からなり、従来日記文学の虚構の問題が論じられつつも個々の指摘にとどまっていた、作為的表現について取り上げている。『蜻蛉日記』には場面全体に亘って作り込まれた表現世界が存することを指摘し、書かれた世界にのみ存在する表現世界の意味について考察する。ここには、日記文学の大きなテーマで

ある虚構の問題が正面から取り上げられている。第十章「唐崎祓いの構造」は、唐崎祓いの作品中の位置を再検討し、そこに仮構された表現の世界を読み解く。第十一章「上巻における「をば」の存在」および第十二章「鳴滝籠りににおける「をば」の存在」は、不在化された「をば」の表現意図を読み解く。第十三章「下巻における漢文的表現」は、漢文的な表現に新しい兼家との関係の構築を見る。第十四章「作為的表現の意義」は、作りこまれた表現が持つ意味を総括的に論じたもの。いずれも論者独自の新見が提示されている。

Ⅳ「「書く」の語と作品形成」は、六つの章からなり、『蜻蛉日記』に「書く」の語の用例が多いことを契機に「書く」を分析し、『蜻蛉日記』が「書く」を基底として成り立っていることを述べている。更に他作品との関わりや「書かず」の表現を考察して、『蜻蛉日記』の「書く」を中心に、「書く／書かず」を、仮名作品全体に関わる問題として論じている。本論文の中核ともいうべき箇所である。第十五章『「蜻蛉日記」成立の基底』では、「書く」がこの作品の核となることばであることを確認する。第十六章『「蜻蛉日記」と『とよかげ』』は、序文の「書く」を考える上で『とよかげ』が重要な作品であることを指摘。第十七章「上巻前半部の成立について」は、上巻前半部が先行して流布したとする説を新たな視点から再検討する。第十八章『「蜻蛉日記」における「書く」の入れ子構造』は、『蜻蛉日記』の「書く」は、叙述内の「書く」から叙述を統括する「書き日記す」へ、そしてそれらを書写する読者の〈書く〉へと入れ子構造になっているところに固有の意味があると説く。第十九章「平安仮名文学の系譜考」は、仮名文に「書かず」が多用されるのは、仮名文が省略を本質としているからであるとする。第二十章『「蜻蛉日記」における「書く」ことの意義』は、Ⅳで説かれてきた論点を総括し、同時代の文学の中で新たな位置づけを行っている。『蜻蛉日記』の「書く」については、さらに多くの周辺作品、私家集や物語文学との関わりをも考察されなければならないだろう。また、第十八章などは、従来にない指摘であり、第十九章もスケールの大きな問題を扱っているが、その分、更なる検証が俟たれる部分が存在することも否めない。どこから自立した散文と称すべきかという問題や、何をもって作り込まれたと定義するかについては異論もあろう。

全体として本論文は、従来の研究が見落としていた部分に新しい光をあてた優れた研究業績と評価できる。また、今後大いなる研究上の進展が期待されることも間違いはない。

ここに本論文を、早稲田大学における博士（文学）の学位に十分値するものと判断する。

以上

2007年1月23日

主任審査委員

早稲田大学教授

早稲田大学助教授

早稲田大学教授

早稲田大学助教授

兼築 信行

博士（文学）早稲田大学 陣野 英則

博士（文学）早稲田大学 津本 信博

博士（文学）早稲田大学 福家 俊幸